



「笹川杯作文コンクール 2009」～中国語で応募～ 第5回優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

「黒柳徹子さんは、我が友」

新疆ウイグル自治区 胡海燕

その日は一家三人で本屋さんを見てまわっていた。『窓際のトットちゃん』を手にした息子が「僕のことを書いてあるの？」—この子は幼名が“トット”だったのだ。こんないきさつで『窓際のトットちゃん』が我が家にやって来た。私が日本の教育家、黒柳徹子女史を知ったのも、これがきっかけである。

私達夫婦は共に教育関係者なので、黒柳女史の作品には興味を持った。『窓際のトットちゃん』は世界で数千万もの読者を有し、“20世紀で最も影響力のある作品”とも言われている。聞くところによると、ユニセフ主席は、黒柳女史を「彼女ほど子供を理解している人はいない！」と賞賛したという。

黒柳女史は、『窓際のトットちゃん』の中で、余りに腕白すぎて退学させられたというユニークな経歴について記している。まさに、この幸せで楽しい学びの時間が、彼女のその後の輝かしい人生を築き上げたのだ。彼女には笑いや感動の中で考えさせられるところがある。

黒柳女史が描くトットちゃんは、想像力が豊かで集中力の足りない女の子。授業中、トットちゃんは窓の外にいるツバメと話をしたり、またある時は窓辺に立ってチンドン屋を待ち、級友達の前で演技させてみたり…その後、小林校長の指導により、寛容と賞賛という教育方針のもと、トットちゃんは人生を積極的に向上させるようになり、広く深い愛の心を持つようになった。黒柳女史は一つ一つの独立したエピソードでトットちゃんの生活を記している。自在な筆致で人物を生き生きと描き出していた。彼女は飾らない言葉で、楽しく憂うことのない学校生活の様子をありのまま記録していった。この本は全体を通して語気がストレートで面白く、女の子の天性が至る所に現れていた。読書をしているのではなく、我が子の成長日記を眺めているような感覚になる。

『窓際のトットちゃん』を読み終わると、愉快に笑ってからたくさんのことを思い返し、この本に描かれている小林校長の指導理念が、私の今後の教育活動の指標となった。巴学園はユニークな学校であり、小林先生は自らの非凡な学識によって子供達を教育している。彼は一貫して子供を批判しなかった。子供達に一般のものとは異なる歌を歌わせ、子供達がみんなと違うことをしても、それどころか、トットちゃんが授業に出席せずトイレで財布を取り出ししていても、彼は尋ねた後「本当にいい子だね」と言うだけだった。この言葉がトットちゃんには忘れられなかった。

この“風変わりな”子供、“風変わりな”学校、“風変わりな”校長が、ちょっとした日常の出来事の中で、実にたくさん感動を与えるのだ。巴学園の日常には憧れを誘うものが、小林校長の教育には熟考を促すものがある—ある“落ちこぼれの子”の成長過程でも、教師としての私に深く考えさせるのだ。現代教育とは、いかに全ての子供の天性を理解し発掘するかという取り組みであるべきだ。子供達に光り満ちた一生を送らせるため。

間もなく、私は『窓際のトットちゃん』の続編である黒柳女史の『小さいときから考えてきたこと』も読んだ。私はこの二冊を通して黒柳女史という人を知り、彼女は私のよき師よき友となった。